

## 美術研究室 卒業・修了制作展雑感

今井治男

本年2月26日から3月1日まで、教育学部美術研究室の卒業生と大学院修了生の美術展を、資料館展示室で開催した。

学部学生にとっては平素の基礎的勉学を踏まえて、その総決算としての研究発表であり、大学院修了生にとっては更に一步進めて造形とは何かを考え、自分の考えを自分のものとして具体化する研究発表の場であったと思う。出品作は次のようであった。

- 山本兼史 人物Ⅰ・Ⅱ、静物Ⅰ（水彩画）
- 高田佳枝 コラージュⅠ・Ⅱ（デザイン）
- 長柄 可 日本の伝統色の再評価についての研究（論文パネル）
- 堀 浩子 隅Ⅰ・Ⅱ（銅版画）
- 坂井敬子 牛骨（油彩画）
- 竹中百合子 秋、夏、人物（油彩画）
- 中野夕紀子 壁面ライト、フロアライトⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（陶芸）
- 宮本貴也 人物Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（油彩画）
- 向 聡子 風の庭、刻、world（銅版画）
- 平野ルリ 鑑賞教育におけるコンテンポラリーアートからの試み（論文パネル）
- 野村泰通 レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画にみる人文主義の影響（論文パネル）



向 聡子「刻ーときー」

以上の作品について若干の批評を加えるとすれば、まず院生平野の論文パネルは現代美術を中学校の美術教育の中でいかに生かすべきかを、さまざまな角度で考察し探求するにさいし、現職の立場を十二分に活用して実践例を列挙し、難解なと考えられがちな現代美術になじみやすい窓口を設けて子供達との接点を求め論述している。これは現職教員ならではの具体的熱意であろう。また向のエッチング「風の庭」は室内に柔らかに吹き込む風を頬に受け止めて、その触感を形象化するという高度な造形的工夫があり、また「刻」は世紀末の象徴主義的雰囲気の中で形象を自己の内面世界と融合させた造形として印象深い作品となった。学部卒業生では宮本の「人物Ⅰ」に彼の豊かな才能を感じる。自画像を正面から捉えたこの油彩画は、単に自分の姿を写し取ったものではなく、自己の心の風景として造形化し成功している。また坂井は牛骨を中心にした静物画で、彼女のいうこれまでの勉強の総決算と言うにふさわしい力強い描写力を示した。中野は陶芸の「壁面ライト」「フロアライト」をとらわれない発想の自由さで縦横にデザインしている。これから必要なことは技術的経験を豊富にして作品的完成度を高めることであろう。そして竹中の風景画は日射とその影を自然主義的な描写で捉えぬくもりのある画面を作っている。

紙数の都合で他の作品に触れることはできないが、このように見てくると実にさまざまな個性が成長していることを感ぜずにはいられない。今度資料館展示室という絶好の会場を得て卒業生たちの未来につながる姿を確認できたことを幸せに感じている次第である。

（教育学部 美術教育）



会場風景 平成8年2月